

スリフトの非表象理論における 社会理論の基本原理についての研究

—— パフォーマンス志向的アプローチの特徴を中心に ——

大橋 昭一

I. まえがき—本稿の課題と論述限定

本稿で取り上げるスリフト (Sir Nigel John Thrift) は、イギリスの「ナイト」の爵位をもつ、社会科学論および地理理論を中心にした世界的に著名な論者で、ウォーウィック大学教授であり、オックスフォード大学招聘教授であるが、何よりも非表象理論 (non-representational theory) の主唱者として知られている。本稿筆者ではすでに別稿 (大橋, 2021) で、スリフトの非表象理論そのものについて考察を試みている。

本稿は、その土台をなすスリフト説の社会理論の基本原理について、スリフトの近年における主著というべき 2008 年の書『非表象理論—空間・政治・情動』(Thrift, 2008) に依拠して説明することを課題とする。本稿は、内容的に言えば、スリフト説に関する上記別稿の続編たるもので、上記別稿と実質上一体のものである。

ところでスリフトは、2008 年の上記書の冒頭部分で (Thrift, 2008, p.2), 一言でいえば、この書は「出来事 (what happens) についての地理学 (geography) である」と提議している。このことは、換言すれば、現実の事柄の最も深部を成している骨格部分 (bare bones) について究明することをいうものと注釈されているが、これは何よりも、本稿論題に即して言えば、出来事について、主体となっているそれぞれの人間のパフォーマンス (performance: 演技的行為) としてとらえようとすることをいうものである。

さらにスリフトは、この場合、研究対象について受け身の立場 (passive stance) にたつものではないことを強調している。すなわち出来事の主体についてどのような行為、つまりパフォーマンスがなされるかという観点で、これをとらえなくては意味がない、というのである。この点はさらにスリフトの論述では、経験的に見聞されるものの内容について、急進的に (radically) 変化してきたものとしてとらえることをいうものとされ、その場合これらの実際の出来事は、自らを表現する (expression) ために一連のプロセスと技術を用いることによって活気あるものとなってきたと規定されている。

ただしそれらは、(礎石ではあるが)「通常的生活では常に補足的地位に (permanent supplement) あり、日常生活では特別な時にしか注目されないものであり (sacrament), しかし時には讚美の言葉 (a hymn) を受けたりするものであるが、それがどのような状況にあるかは、日常的に研究し

知っておくことが肝要なものではある。本書は、そうしたものが生み出される術（すべ：art）について大要を描くことを意図したものである」と書いている。

ここには、非表象理論を土台とするスリフト説が、社会理論において目指すもののエッセンスが示されているが、その場合それには基礎になっているものがある。それは、一言でいえば、上記のように、実際の出来事を華やかな形で現象させる際の土台的な力になっているもの、つまりパフォーマンスである。それはスリフト説ではどのようなものと解されているか。本稿はこの点を中心に論究することを課題とする。

この際注意されるべきことは、スリフトの非表象理論が、そもそも一言でいえば、パース (C. S. Peirce) らの記号理論に反対のものであることである。スリフトによると、パースらの記号理論の特性は、何よりも現実の事象が、(本質と)現象というレベルではなく、(“本質”と理論上区別された)“現象”そのものについても、記号レベルで表象されたものというレベルで、すなわち、(記号による表象という)全くの主観的レベルでとらえられたものになるところにある。スリフト説は、なかんずくこのことに反対のものであって、認識はすべて客観的現実の経験的認識に立脚したものと規定されるべきことを力説するものである(詳しくは大橋, 2021)。

この点で何よりも注目されることは、スリフトが資本主義社会論では、客観的現実としては(本稿では言及していないが、Thrift, 2008, pp.30-31で、マルクス(Karl Marx)の名も挙げて)マルクス主義経済学の基本テーゼである絶対的剰余価値生産や相対的剰余価値生産の命題を指し、それをスリフト説の出発点の1つとしているにもかかわらず、本稿論題に関しては、本稿で後述のように、旧来的な唯物論的な考え方(materialist analysis)は、今日では妥当性が無いと断じていることである(Thrift, 2008, p.147)。

代わって提起されているものが、本稿論題に関しては、本稿筆者のみるところ、人間生活は今やパフォーマンス中心の世界になっているという見地である。つまり、物的なものの確保に精一杯という(唯物的な)時代から、自己の個性発揮的な行為、すなわちパフォーマンスを身上とした社会になっていることを提起しているものである。

スリフトの主張する社会理論の本来の意義は、ここにあると解されるが、本稿では、こうした観点にたつて、スリフトの非表象理論の基礎の1つになっている社会理論の基本原則を究明するものである。

従って本稿では、何よりもまず、スリフトの論述そのものについてできる限り忠実に解明することを基本的スタンスにしている。ただしこの場合、スリフトの所説では、他の論者の所論に依拠して、あるいは対比して、つまり引用したり参照したりして自説を進めているところ、すなわち理論史的アプローチになっているところが、実に多くある。これらも、いうまでもなく、スリフト説の不可欠の部分成すものである。本稿でもそのことが反映されていることをお断わりしておきたい。

以上のような問題意識において、スリフト説で最初に論題となるものは、本稿筆者のみと

ころ、アクターネットワーク理論 (actor-network theory) との関わり合いである。

II. アクターネットワーク理論について

アクターネットワーク理論についてのスリフトの考え方は、肯定的と否定的との2面的なものである (以下本項は Thrift, 2008, p.110ff. による)。すなわち一方では、自らの理論が多くの中でそれと親近性 (affinities) があるものである。すなわち次の点でアクターネットワーク理論と根本的立脚点を同じくするものであると宣している。

例えば、アクターネットワーク理論では、対象 (object) の“エイジェント性” (agency) に重点が置かれ、エイジェントにより形成され維持される“空間と時間の根のある多数性” (the rhizomatic multiplicity of space-times) に力点をおくものであること、さらには (物事について) 単なる反映 (reflection) という考えにたつのではなく、“新しい発展, すなわち発明や工夫” (invention) があることを立脚点としていることである。

しかし他方では、「私 (スリフト) の所論にとって、アクターネットワーク理論にはいくつかの点で支持しがたい、理論上の難点がある」として、それを批判的に論じる形で自らの理論的立場を提示するものとしている。

まずスリフトは、ヘナーフ (Henaff, A., 1997) に依拠して、アクターネットワーク理論では、それぞれのサイトの独自性 (particularities of sites)、環境の予測不可能性 (unpredictability of circumstances)、当該光景のパターン不均等性 (uneven patterns of the landscapes)、出来上がっているものの偶然性 (hazardous nature of becoming) に力点が置かれるものであるが故に、アクターネットワーク理論は、確かに一定の媒介程度の効果性 (certain intermediated kind of effectivity) を提示するには適しているが、しかし期待されていないものや一方的なもの (the unexpected and the unrequited) が出現するようなどときには、有効性を失う、という問題点がある。換言すれば、アクターネットワーク理論には次のような問題点があるとする (cited in Thrift, 2008, p.110)。

第1に、例えば一時的なイベント (event: ここでは広く一般的に出来事などをいう) や、瞬間的な脈絡のないもの、あるいは潜勢力のあるものの先駆的状态などについて、十分な認識が持てないことである。第2に、もともとアクターネットワーク理論は、イベントに強く注目するものであるが、その場合、実際にはトラブルになる行き詰まりや破裂を起し、進む方向を別なものとして事を収めるようにすることが往々にしてあり、結局、中和化されたものに終わっていることがあることである。

第3に、アクターの行う行為 (action) について、すべての関係者の参画のもとに行われるという、スリフトからみても正しい主張がなされていながらも、いわゆるヒューマニズム論の観点から人間要素の軽視があるという批判がなされると、ごく簡単にそれを認め、退却することがなされていることである。

この点についてスリフトは、「アクターネットワーク理論家たちは、人間主体が中心にあり、それがすべてについて主動的なものであることを認めたがらないのである。しかしアクターネットワーク理論は、こうしたことに対し否定的な結果、かえって特殊的に人間的に構想する能力 (expression)、イノベーションを遂行する力を軽視する (neglect) 傾向にあった。この点は、要するに、アクターネットワーク理論では、結局、物事では事物 (things) がないと始まらないという単純な理由だけで、人間の力が消し去られてしまうものになっているためであるが、(スリフトとしては) そうしたものでは決してない、と考えるべきものである。…つまり、こうした人間の構想力は、間違いなく客体世界と結び付いたものではあるが、しかしすべてが客体世界に還元されるものでは決してない」(Thrift, 2008, p.111: カッコ内は本稿筆者のもの、以下同様) と強調している。つまりスリフトは、物事は人間の関与のもとに進むものであることを見誤ってはならないと主張しているのである。ここに、スリフト説の大きな注目すべき見地の1つがある。

そこでスリフトは、「このことは、社会科学で広く見られる発生論的傾向 (genetic outlook) から離れる必要があることを意味し、(これまでの) 発展論的説明 (developmental account) によりすべてが明らかにされているというものではないことを意味する」(Thrift, 2008, p.111) と述べている。

こうしたこれまでの考え方を是正するものとして、スリフトの提議するものが“考え方の新しい様式” (new style of thought) であるが、その第1のものは“プッシュ” (push) とされている。

Ⅲ. 考え方の新しい様式としてのプッシュ

(1) プッシュの考え方

ここでプッシュとは何かに関連し、スリフトは冒頭で、大意、次のように述べている (以下本項は Thrift, 2008, p.113ff. による)。まず、これまでイベントを取り上げてきた社会的文化的理論 (social and cultural theories) のうち、あまりにも多くのものは、基本的には過程無視的なもの (fundamentally unprocessual) であった。この欠陥を埋めようとするものが、(スリフトの提起している) 非表象理論であるが、ただしこの場合には、なかんずく (スリフトが) プッシュとよぶものによってであり、その上で、プッシュとは何かについて次のように規定されるものとする。

すなわちそれは、「この世界が動き続けること (keep the world rolling over) を可能にするものであり、変化 (change) のエネルギーになるものであって、変換の作業 (work of transformation) をするものである。変換により再生産において同一ではないものが生まれる」(Thrift, 2008, p.113)。これは、スリフトによると“非認識的存在論的活動” (non-epistemic ontology-activity) といわれるものであるが、これが非表象理論の現実的土台をなすものと措定される。

故に、非表象理論は、もともとこの世界について表象すること (representation) よりも、効率性 (effectivity) の観点にたつもので、(それは) “何か” (what) ということよりも、“いかにして” (how) の解明に重点をおくものであって、それには次の3つの理論的系譜があるものとしている。

その第1は、近年におけるフェミニズムの理論で、なかんずくバトラー (Butler, J., 1990) やスレッドゴールド (Threadgold, T., 1997) の所論、さらには空間についてのイリガレイ (Irigaray, L., 1999) の所説などである。第2は、ウィットゲンシュタイン (Wittgenstein, L., 1969) やブルデュー (Bourdieu, P., 1991) などの実践 (practice) にかかわる論究である。第3は、アクターネットワーク理論に始まる空間に関する研究をさらに発展させたもので、これにはさらにベイトソン (Bateson, G., 1973) らのような遺伝学 (genetics) に立脚するものもあるが、一言でいえば、「生物学的哲学」 (biological philosophy) といわれるものである。もとよりこれら3者は、相互に関連する。

以上総括的にいえば、これらは要するに実践に重点をおくものであり、「最も重要なことは、こうした考え方によれば、この世界は創られつつある (making) もの、つまり過程的なもの、行為し続けているもの (in action) であって、すべてが現にあるもので、動いているととらえられるものである」と結論づけられるものであって、こうしたとらえ方を具体的に示すものが、事柄をイベントとしてとらえる考え方であるとしている。次に、この点を考察する。

(2) イベントのとらえ方

この項のタイトルは「それぞれのイベントには驚かさせられるものがある」 (the surprisingness of the event) となっていて、イベントには驚くべきものがあることが、何よりもテーマであるとされている (以下本項は Thrift, 2008, p.114ff. による)。この場合イベントは、とりわけ“ボウリングしている世界” (a world bowling along) としてとらえられるべきことが強調される。

故に例えば意思決定は瞬間的になされなければならない。つまりそれは、“瞬間的世界” (momentary world) であって、“沈黙考する世界” (contemplative world) といったものではないことが力説される。従ってそこでは、何か結果が生まれるが、それは永遠に続く環境の中での1つの繋がり、すなわちチェインとしてとらえなければならないものと提議される。

このことは、未知の世界 (the unknown) に入ることをいうが、しかしそれはあくまでも行為の世界であるから、可能性 (possibilities) に満ちた世界であって、可能性が実際性 (actualities) を上廻る社会である。故にそれは急進的な (radical) 可能性がある社会であり、例えばモーソン (Morson, G. S., 1994) が“実行されていない可能性という影法師的にできている中間的領域” (a sideshadowed middle realm of unactualized possibilities) とよんだものであるとしている。ちなみにモーソンは、次のように述べている。

「こうした未実現の可能性とは、確かに起きてはいないが、起きたかもしれないことをいう。物事 (things) は、(時間の経過の中では) これまでの姿とは別の姿を採ることがありうるものである。すなわち、現にわれわれが知っている現在の姿とは異なったものになる選択肢や、将来異なった道を探る選択肢がある。これは可能性の中間的な (終局的ではない) 領域である。これに焦点を当てることによって、それが現在の姿 (event) とどのような関係にあるか究明することができるが、そうしたことによって、そしてこれらの物事は異なった様相のものになっているかもしれ

ないことを知ることによって、つまりこうした影法師的なことをみることによって、われわれの時間に関する解放性 (openness) の意識は広まる」 (cited in Thrift, 2008, p.114)。

この上にとってスリフトは、イベントというものは、それぞれの場合のポテンシャル、可能性、試みにやってみること (experimentation) と関連づけられうるが、しかしそれはナイーブなバイタリズムを可とするものではないとし、イベントの可能性は常に限定的なものである。というのはイベントは、ネットワークをなす力 (networks of power) の枠内でなされなくてはならないからである。そうでなければ、反復性 (iterability) が保証されない、というのである (Thrift, 2008, p.114)。

もっともスリフトによると、イベントが人を驚かさせる能力は、隠れていて、見えないものであるが、常にあるものと措定される。ただしここで注目されることは、スリフトが、もしイベントを超えるものがあるとすれば、それは実践の中で得られた記号というものが生まれるところにあるとしていることである (Thrift, 2008, p.115)。ただしここでいう記号は、ソシユールにおいて指摘されているところの、シグニファイアー (signifier) とシグニファイド (signified) との関係は恣意的なものという意味におけるそれとは、別のものであることが強調されている (Thrift, 2008, p.115)。そこでこの点についてスリフトは、さらにマークス (Marks, J., 1998) が次のように述べているところを引用している。

すなわち、「記号というものは、(通常の日常的な) 思考が危機 (crisis) に陥ったときに、機能を発揮する。というのは、そうしたときには表象 (representation) の世界を再機能させることが行われなくなっているからである。記号は通常的思考伝達の機能不全状態を意味しているから、シグニファイアーとシグニファイドは、そうした状態を代弁したものである」 (cited in Thrift, 2008, p.115) というのである。そこで次に、シグニフィケーションの意味が問題になる。

(3) シグニフィケーションの3要素

ここでスリフトは、バイトソンに依拠して、シグニフィケーションには次の3要素 (elements) があるとする (以下本項は Thrift, 2008, p.115ff. による)。第1に、人間の動き、すなわちエムボディメント (embodiment) である。ただしこれは、「全くはっきりしているように、それぞれの個人の具体的な身体そのものをいうのではなくて、身体的に演じられると信じられているところの、身体活動分野 (a field of flesh) としてのエムボディメントをいうのであり、例えば悲しいときには涙を流すことで示されるものである。それ故それは、(個人的な) 実際の行為そのものを代表する (represent) ものではないし、単なる過去の記憶でもない。あくまでも、過去を (現在のものとして) 活かし (enact)、(現在の) 生活の中に生き返らせることをいうものである」と規定される。

この上にとってスリフトは、こうしたエムボディメントの概念に密接に関連したものが情動 (affect) の概念であるとする。ただしここでいう情動は、単なる個人の感動 (emotion) をいうものではない。すなわち情感 (affections) とか知覚 (perceptions) といったものではないとして、例えばドゥルーズ (Deleuze, G., 1995) が次のように述べているところを引用している (cited in Thrift, 2008, p.116)。

すなわち「知覚表象 (percepts) は、知覚そのもの (perceptions) ではない。知覚表象は、それを経験した当該の人々よりも長く生き続けるところの、感覚 (sensations) や関係 (relations) の集まり (pockets) である。情動は、単なる感触 (feelings) ではない。それは、それを経験した人を超えて存続するものである」。

この上にたつて、シグニフィケーションの第2の要素として、(その他の)の事物 (things) が挙げられる。ここでいう事物とは、スリフトによると、その自身で反響性 (resonances) をもつものであり、従ってアクターネットワーク理論によって巧みにとらえられていたものであるが、ただしその反響性にはいくつかの種類があるものである。例えば、事物の背後で行為するものがある。そうした例には、ラトゥールが挙げている、自動的に閉まるドアがある (Thrift, 2008, p.117)。

換言すれば、ここでは、人間存在のあり方が問われるものとなる。すなわち人間の身体は、一方では、こうしたテクノロジーに支援されたものであるが、他方では、これによって人間は、現志向的な (present oriented)、いわゆる地図志向的な (cartographic) ものととらえられることになる。しかしそれは、例えば精神分析学でいえば、人間意識のいわゆる考古学的な (archaeological) 考え方とは異なるものである。

故に人間は、スリフトによると、ゲル (Gell, A., 1998) の言葉を借りると (cited in Thrift, 2008, p.118)、特定の“空間-時間”として調整された世界の中ではあるが、しかし区画が一定しない範囲 (ill-defined constellation) の中で動いているものと規定される。ただしそれは、ゲルによると「伝記的なイベント (biographical events) とイベントの記憶の広がり、およびその場合の物的対象、足跡、ならびに残り跡の多様なあり様から成るものであり、そしてこのあり様からある人間の存在を推定し、かつ、その全体においてエイジェンシーとその存在が証拠づけられるものである。この場合そのエイジェンシーと存在性とは、当該イベントの伝記的存在期間全般にわたるだけでなく、その生物的死去の後までも残るもの」と規定される。

シグニフィケーションの第3の要素は、創造性 (creativity) である。創造性についてスリフトは、全体的に言えば、その特性の究明が重要であるにもかかわらず、一定の表現行為 (expressive action) を解明するという意味では、アカデミックな分野での究明はあまり進んでこなかった。しかし、例えばパース、デューイ、ジンメル、ドゥルーズらは例外的で、一般的に言えば、構想力 (power of the imagination) という形で展開されてきたものであるとしている。

しかしここでスリフトが特に指摘するものは、あくまでも創造性についての研究の低さで、スリフトは、このような創造性に対する関心の低さによって、結局、表現行為についての考察が困難になっている。なかんずく、通常遊び (play) といわれるところの、社会的文化的行為がどのようなものかについて究明されることがなくなっている。遊びはパフォーマンス的な実験 (performative experiment) の過程であって、ダンスなどの身体的実践の焦点になるものである、と論じている (Thrift, 2008, p.119)。

以上の上にたつて、次に、“再時間的空間” (re-timing space) と“再空間的時間” (re-spacing time)

について論じられるべきものとされている。

IV. 再時間的空間と再空間的時間

スリフトはこの点について、「イベントについての非表象理論から起きる今1つの大きな要請は、空間と時間について再規定すること (refiguring) である。シグニフィケーションについて上記のように考えると、今や空間と時間の考え方について根本的に再規定が必要になる。ここで問題であることは、空間と時間についてニュートン的な単一的枠組みで考えるのではなく、複数の空間・時間 (multiple spaces and times) という考え方が必要になるということである」と提議している (以下本項は Thrift, 2008, p.119ff. による)。

ここでスリフトは、例えばアクターネットワーク理論の主唱者、ラトゥール (Latour, B., 1997) がイベントで前提になっているのは、空間・時間についてのニュートンの枠組み (the Newtonian sensoria) というものではないと提起していることを良しとし、ラトゥールがさらに次のように提議しているところを引用している。

すなわちラトゥールは、空間と時間は (単一の枠組みとして) われわれの知覚を形成しているものではない。それは非リアルの (the unreal) ものであり、ア priori に存在するものと解されているものではあるが、われわれが存在するものやそのエンティティの複数性 (multiplicity) をとらえようとする場合には心の中に置いておかなくてはならないものである。…つまりわれわれは、空間・時間についてのわれわれの考え方を第3の伝統的なもの、すなわちライプニッツ的な考えに立脚したものにすることが必要である。空間・時間には、それぞれのエンティティ相互間の関係が現れているものと考えねばならない。そこでは単一の空間・時間しかないという考え方は、妥当しない。…その代わりに (エンティティ相互の) 関係がいかなるタイプであるかによって、空間・時間にも異なる複数のもの (many) があると考えねばならない、と提議している (cited in Thrift, 2008, p.119)。

スリフト自らは、この上にたって、改めて「空間・時間についてのとらえ方には、新しい幾何学的な考え方 (new geometric metaphors) が必要とされる。それは、それぞれに独自のタームをもつものであり、その以外の異なった空間・時間の数と特性を示すものである」(Thrift, 2008, p.120) と論じている。

これはトポロジー (topologies : 位相) にかかわる問題であるが、ラトゥールもスリフトも、それについて、要するに、固定的なものとも不変的なものとも考えるべきではないというのである。少なくともそれは、どのようなものかについて絶えず考えることを必要とするものである。これは、スリフトによると、事象の多様性 (diversification) の根幹をなす命題であるが、これによってそれぞれの場の特性や働く力の特徴が明らかになるものと措定されている。

ただしスリフトによると、ここで注意されるべきことは、実際の場では常に (こうした空間・時

間の差異性に基づいて) 実際には起きていない“亡霊的な関係”(ghostly correlates) が生まれるかもしれないことである。これは、例えば「(実際には) 無い事柄について現にあるかのように演出されるもの」(rehearse of the active presence of absent things) で、空間・時間についての幻影 (phantoms) と規定される。

ちなみにこれは、例えば次のような事態をいうものである。すなわち、どの空間も過去を背負っているということである。いわゆる近代的な都市などでも、当然に過去の時代変遷を背負っているが、例えばその点はそれぞれの地域の名称、あるいは名称の変化に現われている。それ故、スリフトの引用によれば、ゴードン (Gordon, A., 1997) は、存在するとは考えられないものでも、確固たる現実 (a steely presence) のものがあって、現実のように作用を行い (act)、時には当然の現実のように (taken-for-granted realities) 扱われるものがある。このことは驚くことではない、と述べている (cited in Thrift, 2008, p.121)。

以上の上にとってスリフトは、改めて「非表象理論では、知識とよばれるものは、(これまでとは) 根本的に異なった意味 (a radically different sense) でとらえられなければならない。すなわちそれは、あくまでも、“試み的なもの”(tentative) なのである。もはや認識論的な媒介物 (an epistemological bias) ではなく、実践 (practice) を指すだけのもの、もしくはその一部をいうだけのものである」。つまり旧来的知識は、現在の非表象理論によれば、「一面的で偏ったものにとらわれているもの」と提議される (Thrift, 2008, p.121)。

ここには、非表象理論に立脚する学問方法論が示されているが、この点は、ニューマン／ホルツマン (Newman, F. and Holzman, L., 1997) が次のように述べているところによって補足されている。ニューマン／ホルツマンは、「非表象理論家たちは、端的に言えば、『われわれは知ること (knowing) を本当に放棄することができるか』を問わんとしているのである。…つまり、われわれはどのようにして知るかについて、“われわれは知らない” といわざるを得ないからである。しかしこうした回答は、いわゆる現代認識論 (modern epistemology) の考え方からは、受け容れられないであろう。というのは、そうした考え方によれば、存在するものは、必ず認識されるはずであるからである。しかしこれは、存在論 (ontology) を認識論に還元したところの、典型的な二重論法ではないか。…ただしこの点は別にしても、われわれは知ことを止める (give up) ことができるかという問題は残る。…(関連して考えれば、これは)、モダニズムの実体的な神話性 (substantive myths) を克服できるかという問題であるが、われわれは、それは可能と考える。というのは、モダニズムは社会的アクティビズム的に (socially activistically)、すなわち旧来的形態をディコンストラクシオンの (deconstructively) に、かつリコンストラクシオンの (reconstructively) 克服できると考えるからである」(cited in Thrift, 2008, pp.121-122) と述べている。

結局、スリフトがここで言わんとするところは、総括的には、次の点にある。「社会科学と人文科学では、プッシュに関わる考え方の多くは、パフォーマンスに関連して表現されるもの (metaphor: 以下メタファーという) を中心に結晶化しているものである。メタファーとしてパフォー

マンスについて関心が持たれるのは、『(人間の) 一生は劇場 (で芝居を観ているような) ものだ』という (受け身的な) 考えから『(人間の) 一生は (主体的な) パフォーマンスだ』という考えに革命的に転化すること (revolution) であり, いわば, ある科学の中のある特定の問題のみに関心を持つことから, 全面的に1つの分野としてのそれに (a full-blown discipline) 転化するようなものである。…しかしこうしたパフォーマンスのメタファーは未完成のものである。というよりは, ここでは人間の一生は永遠に試行的なもの (rehearsal) ととらえられているといえる。しかしこの場合, メタファーは, 極めて曖昧な形で用いられることが多い。例えば, 多くのことについて見せかけだけのダイナミズム (a specious dynamism) で提示したり, 精査 (exploration) という仮面のもとに行われる単なる描写 (description masquerading as an exploration) であつたり, 善良なことをプロセス上欠陥があるものとするところがあるものである」(Thrift, 2008, p.124)。そこで次に, パフォーマンスについて考察する必要がある。

V. パフォーマンスについて

ここでパフォーマンスとは, スリフトによると, 改めて「人文科学において最も広まっているメタファーの1つである。というのは, 物事の意味 (meaning) は, 物事自体にあるのではなく, その過程により生み出されるものであることが, パフォーマンスによって最もよく説明されるからである。つまりそれは, 単なる表象 (representation) というレベルではない意味を解明するに適したものである」と提議される (以下本項は Thrift, 2008, p.124ff. による)。

その上で, この場合パフォーマンス・メタファーには次の4種 (usages) があるとされる。①シンボリックな相互作用論 (symbolic interactionism), ②社会学的な解明論 (sociological accounts), ③現代文化理論 (contemporary cultural theory), ④パフォーマンスのアート (performing art / arts of performing) である。以下, 順にレビューする。

(1) シンボリックな相互作用論：パフォーマンスのドラマトゥルギー的アプローチ

これは, スリフトによると, 何よりも (ツーリズム論関係でも名高い) ゴフマンの1971年の著 (Goffman, E., 1971) に代表されるもので, その後“シンボリック相互作用論学派” (the symbolic interactionism school) として定着したものである (以下本項は Thrift, 2008, p.125ff. による)。もっともこれは, スリフトによると, 理論的には, 例えば儀礼論で有名なターナーらに多く依存するところの, 社会的行動についてのドラマトゥルギー (dramaturgy) 的アプローチに依存するところがあり, さらには, 社会的行動をドラマとしてとらえるバークのドラマ論 (dramatism) により推進させられたものと位置づけられる。

まず, ゴフマンの説をみると, 1971年の(上記の)著と1974年の著 (Goffman, E., 1974) では見解がやや変わっている。1971年の著では, ゴフマンの見解は次の2点を立脚点にし, スリフトに

よると、ここにシンボリックな相互作用論のいわば本来の考え方はあると考えられる。

その第1は、パフォーマンスには観客 (audience : 以下ではオーディエンスともいう) のいることを重要条件とするもので、オーディエンスの行う拍手などの行為が枢要な役割をはたすと考えるものである。つまりパフォーマンスは演者と観客との相互作用が要諦になるというのである。第2は、パフォーマンスは表舞台で行われるが、その準備等のために裏舞台 (back-stage) を必要とし、当該パフォーマンスの真実の姿は、案外、(表舞台ではなく) 裏舞台で見られるというものである。

しかし、少なくともゴフマンの1971年の著については、スリフトによると、人間の相互作用に関し(例えば遊園地等で見られる)わざとらしい演技 (contrivance) や見せびらかし (pretense)、ごまかし (deceit)、つまり演出の仕方を過剰に評価しているものという批判が多くあった。ゴフマンはその後の著作で、話すことにかかわる束の間の演技 (the fleeting enactments of talk) について論じ、こうした批判に答えている。しかしこの1974年の著についても、例えばバーンズ (Burns, T., 1992) は、次のように論評している (cited in Thrift, 2008, p.126)。

すなわち、ゴフマンでは、1971年の著にくらべて1974年の著は、「新しい概念的フレームワーク (a new conceptual framework) 以上のものがあるとされているが、しかし (バーンズのみるところ) 両著書における主張の違いは全くはっきりしているというものではない (quite bluntly)。例えばゴフマンの (この世のものはすべて演技と主張する) 1971年の著でも『この世のものはすべてが必ずしも演技されたものではない』と書かれているし、他方 (すべてのものが演技ということを否定するはずの) 1974年の著でも『この世のものはすべてが演技されたもののように見える』と書かれている」。

その上でバーンズ自身は、普通の人間が個人として経験する生活において現実的 (real) とは、実際そのもの (real) であるとともに (主観的に) 思いこんだりすること (make-believe) を含むものである。例えば、起こってしまった失敗を悔やんでくよくよしたり、楽しいことや都合のいいことが起きよう夢想したりするものである。「要するに、人生の大部分は (これらのことを含め、かつ、独り言を含めて) 話すこと (talk) にある」としている。スリフトとしては、今日におけるシンボリックな相互作用論の考え方は、バーンズのこの言葉に示されているというのである。

(2) 社会学的な解明論：パフォーマンスの一般理論

パフォーマンス・メタファーの第2のものは、スリフトによると、「今やパフォーマンスの時代 (performative time) にあることを強調するためには、(上記の) ドラマトゥルギー的アプローチは超える必要があることを主張するものであり」、それは一言でいえば、「現代社会では、あらゆる種類のパフォーマンスがキー要因になっていることを主張するものである。ただし論者によると、パフォーマンスについても、(今日では多くが) 市場立脚的な様式 (market-based encounters) になっており、それによって付加価値 (端的には剰余つまり利益) が生まれるような形で行われることが肝要で、エムボディメントについてもそうしたものとして考察することが肝要となっている

ことを強調するものがある。ただしこうした場合でも、働く場所は1つの舞台 (a stage) であり、その展開場所は劇場 (theatre) といっているものであって、そこでそれぞれの人はパフォーマンスするものであり、従ってロールプレイング (role-playing) のような訓練などが行われて、効果を高めることが行われている」と定義されるものとされている (以下本項は Thrift, 2008, p.126ff. による)。

もっともこのような定義によると、本物ではないようなものを演出してみせたり、偽造することによって、さも本物のように見せる行為も良しとされることになるという批判があるが、この点についてスリフトは、例えばクラング (Crang, P., 1997) がツーリズムにかかわって、大意、次のように述べているところを引用している (cited in Thrift, 2008, p.127)。

すなわち、(ここでいう) 社会的実践とは、例えばツーリズム労働 (tourism work) の場合、経営者 (manager)、従業員、消費者が関与して行うと予定されているものである。故にこの場合、ドラマトゥルギー的な考え方が土台とされる場合には、確かに概念上および経験上において難点がある。しかし看過されてはならないことは、事実としてツーリズムに含まれているものを文化的に理解するのに有用なディスカursiveな形成物 (discursive formation) がある場合、それらのものでは、こうしたものを解明する道が採られることがあることである。ただしその際、(多くの場合) 経営者の理論 (managerial theories) が適用されることになるから、ツーリズム関連的な仕事と働く場所は経営的に構成されるものになる。そこで、それらについて、(例えば資本主義的労働についての“労働過程論”のように) 非熟練化 (deskilling) や流動化 (flexibility) を指摘せんとする、作業土台的状况 (work-based situation) に立脚した理論が適用される場合、あるいは逆に(そのことが) 批判の対象とされる場合には、補完的な方法 (a complementary route) として役立つものである。…もっともこれは、ツーリズムにおける人間雇用問題についてのいわば限界的考察 (marginalising studies) であるが、この点は別にしても、以上で提議されている見解のいくつかは、現在の資本主義社会における賃労働 (paid work) についての、眠ったままの状態にある、理論的に中核的ではあるが限界的なものに留まっているものを、頂点の地位に置くよう揺り動かすものになるかもしれない、と提議している。

そこでスリフトは、パフォーマンスについて、ケルショー (Kershaw, B., 1994) が次のように述べているところをさらに引用している (cited in Thrift, 2008, p.127)。

すなわち、(今日のような) 発達した社会では、パフォーマンスが日常生活の中で劇的に撒き散らされている。つまり、メディアの報道などをみると、表象の様式のパフォーマンスの世界で充満している。ただしそこではパフォーマンスのイデオロギー的な機能 (ideological functions) はますます多様なものとなっている。ただし時には薄められたものになっている場合もある。

しかし、さらにコミュニケーションのグローバル化によって、他のこれまでにない文化がパフォーマンス的なものとして登場していることもある。これによって人間のアイデンティティの像は拡大され、見る者のまなざし (gaze) の対象になっている。しかしこれによって、特定の国や地域で起きている悲惨な状況についての社会的政治的共感性 (resonances) が、見慣れた光景

として、いわば冷静な、単なる観察者の目 (relentless opacity) で済まされてしまうことはある。

これは、スリフトによると、要するにパフォーマンスの盛行によりオーディエンスすなわち観衆に変化が生まれるためである。そこでスリフトは、アーバークロムビー／ロングハースト (Abercrombie, N. and Longhurst, B., 1998) によって、メディアの成長と一般への浸透によって、今やオーディエンスとは何かについて再検討する必要があることが提起されていることを指摘している (cited in Thrift, 2008, p.128)。

アーバークロムビー／ロングハーストは、一言でいえば、今日のパフォーマンスでは、パフォーマンスをする人 (パフォーマー) とオーディエンスとは同一人になると主張している。すなわち「パフォーマンスは、今やわれわれの日常生活に深く浸み込んだものとなっている。それは、われわれや他の人がそうした状態にあることに見慣れてしまい、改めてそうした状態のあることを感じないほどのものである。…この場合われわれはオーディエンスであると同時にパフォーマンスする人である。…パフォーマンスが改めて行われるというものではない」とし、オーディエンスの広がり、モダン時代に特徴的な2つの方向で起きると提示している。

すなわち、「一方では、この世の中がますますスペクタクルなもの (spectacle) として提示されることによってであり、他方では、それぞれの個人がナルシズム的なもの (narcissistic) になることによってである。人々は、オーディエンスであると同時にパフォーマンスする人、すなわち、観る人であると同時に、観られる人になる。スペクタクルとナルシズムとは1つの円を描くように相互作用的に進展するが、その際メディアによって強く促進される。この場合パフォーマンスは日常生活に浸み込んだもの (leaked out) である」 (cited in Thrift, 2008, p.128)。

ここには現代社会の全体的な、あるいは構造的なパフォーマンスの状況が提示されている。これらの上にたつて、しかしスリフトは、オーディエンスはメディアを1つの資源とし、かつ、日常生活に新しい機能を生み出し、そうした形で新しい日常生活を生み出すところの、新しい種類の熟練 (skill) と知識を創出しているものである。それは、熱狂的なファンのような行為に立脚したところの技能的 (technical)、分析的 (analytical)、参照的 (referential) な技術と知識であつて、今やそれが普遍的なものになっていると、この部分を締めくくっている (Thrift, 2008, p.128)。

(3) 現代文化理論：パフォーマンス論の展開

ここにおけるスリフトの所論は、結論を先にいえば、一方では、(本稿既述で一言した) バトラー (Butler, 1997) らの説を、現代文化論として不適當なものとして批判するとともに、他方ではドゥルーズ (Deleuze, G., 1986, 1995) の説を良しとして評価するものであるが、ここにはスリフトのいう現代文化理論がどのようなものをいうかが示されている (以下本項は Thrift, 2008, p.128ff. による)。以下スリフトに拠って、この両者について特徴点を考察する。

まずバトラー説について、スリフトは、エムボディメントを基礎においている点や、単純な構成主義的所論の域を超えており、記号と (その対象である) レファラント (referent: 厳密には object

とは異なる。この点については大橋(2018 参照)との関連について問題提起している点などを注目すべきものとしている。

この場合バトラー説の意図するところは、もともとディスコース理論とパフォーマンスとを結び付けようとしたところにあった。しかしスリフトのみるところ、それは「歴史とパフォーマンスとの双方にとって極めて保守的なとらえ方のものであった」。というのは、バトラー説によると、パフォーマンスと歴史とは分離できないものとされているからである。それ故その後バトラーは、こうした旧来の考え方を変更し、(歴史ではなくて)パフォーマンスに力点をおくようになってきているが、スリフトは、このことは驚くことではないと評し、バトラーは今や言語的なものをもパフォーマンスの力として再構成しようとしているものであると位置づけるとともに、例えばブルデュー (Bourdieu, P., 1991) などによって、こうしたパフォーマンス論は欠陥があるものと指摘されている、と評している (Thrift, 2008, p.129)。

いずれにしろ、スリフトによると、「バトラーでは、説明が必要なところで説明のなされていないところが多い。これは、究極的には、バトラーがパフォーマンスのテキストのモデルを記号とレファラントに立脚して完全に仕上げることができているところに原因があると考えられる。同じことが妥当する論者もあるが、しかし現代文化理論の今一人の論者であるドゥルーズについては、そうではない」と総括し、ドゥルーズについて以下のように、引用し論じている (Thrift, 2008, pp.131-132)。

すなわち、ドゥルーズの場合には、パフォーマンスティブであること (the performative) が、思考と生活についての概念形成上不可欠な部分をなすものである。例えばかれは、「私 (ドゥルーズ) にとっては、テキストというものは、テキストを離れた実践 (an extra-textual practice) をいうだけのものであって、全体からいえばごく小部分を成すに過ぎない。それは、例えばディコンストラクションの方法によって、もしくはテキスト通りの実践によって、あるいはその他の方法によって、コメントできるというものではない。これは要するに、テキストで示されているものが、テキスト外部の実践においてどのような有用性を持つかという問題である」と述べている (Deleuze, 1995, cited in Thrift, 2008, pp.131-132)。

この上でスリフトは、「思考は、生活と同様に、新しい出会いによって効果が創り出されることを主たる目標とするところの、変化 (variation: 変数の選択と総合を含む一ただし原著におけるカッコ) の絶え間のない生成を付け加えた、1つのものへの融合 (an accretion) である」と提議し、さらに「ドゥルーズではパフォーマンスは、記号の意味を知り、創り出すにあたってのキー的手段としてとらえられているものである。それは、記号についての徴候学 (symptomatology) であり、診断学 (diagnostics) であって、そうしたとらえ方によって、特定の生活可能性を際立たせ、かつ、より多くの生存様式を可能にするものである」と述べ、この部分の締めくくりに言葉としている (Thrift, 2008, p.132)。

(4) パフォーマンス・アート：パフォーマンス概念の拡張

これは、スリフトによると、創造的パフォーマンス (creative performance) といっているものであるが、恐らくはパフォーマンス・メタファーの中では、単一のものとして最も持続されてきたものである (以下本項は Thrift, 2008, p.133ff. による)。しかしこれをパフォーマンスとしてどのように位置づけるかについては、問題があったものである。例えば、単なる劇場的なものを超えるものかどうかについて論争があった。ちなみにこの点についてスリフトは、シェヒナー (Schechner, R., 1998) が次のように述べているところを引用している (cited in Thrift, 2008, p.133)。

「西洋社会では、近年まで、パフォーマンスは劇場型、音楽とダンス型、芸術型、パフォーマンス型に分けて考えられてきた。最近になって、少なくとも 1960 年代以降では、美的価値追求的 (aesthetic) パフォーマンスが進展しているが、これは、厳密には、劇場型や音楽とダンス型、さらには純芸術型 (visual arts) とは考えられていない。通常の、いわゆるパフォーマンス・アートやミックスド・メディア (mixed media) といわれるものも、境界が不鮮明である。こうしたことからいうと、今や“パフォーマンスティブ”という言葉には、伝統的にはパフォーマンス・アートとはみられなかったもの、例えば衣裳合わせや単なる文章、話し方なども含むものになっている」。

こうしたものを、スリフトは、“劇場プラス” (theatre-plus) モデルとよび、芸術的メディアおよびその諸形態ならびに実践が収斂したもの (convergence) と特徴づけるとともに、こうしたパフォーマンス概念の拡張 (expanding) とともに、いくつかの問題点が起きていると提議している。例えば、とりわけマスメディアの普及により“ライブ性”の問題が生まれている。これは、端的には、マスメディアの進展によって、出来事の真の姿がますます脚色されて提示されるものになるから、(これまで) パフォーマンスにあるとされてきた直接的体験性は、鈍いものになることをいうものである。この点についてスリフトは、アーバークロムビー／ロングハーストが次のように書いているところをさらに引用している (cited in Thrift, 2008, p.134)。

すなわち、「パフォーマンスは、チェーンで結ばれた延長された形を成しているものである。つまりそれは、かなり離れた時と所に移って行くことがある。例えば (時間的にみると) 過去のパフォーマンスが、メディア的に記録されて、現在において現われ、現在のもののように見えることがある。(空間的にみると) パフォーマンスは、もともとのパフォーマンスの空間的脈絡から離れて (別空間のものとして) 提示されることがある。結果、そのパフォーマンスがどのような時間と空間のセットでなされたものかが曖昧になることがある。当該時点のものとその後のものとは、当然ながら、同一のものではない」。

この最後の点、すなわち過去のを現時点において再現したものは、“構成された (constituted) パフォーマンス” といわれたりするが、この点についてスリフトは、例えばマーチン (Martin, R., 1998) が次のように述べているところを引用している (cited in Thrift, 2008, p.134)。

マーチンは、大意、次のように、すなわち、こうしたパフォーマンスのユニークさは、当該

パフォーマンスを構成する様々な構成物から成る力の結合体であることから生まれる。そうした構成物にはオーディエンス、パフォーマー、テキスト（脚本など）、売り上げ（revenues）、マネジメント、上演スペース、衣裳、舞台装置や背景基盤などがある。これらを集めた場所の形成は、厳密に言えば1回限りのものであるし、当初資金を必要とするものでもある、と述べている。

この上にたつてスリフトは、総括的に、パフォーマンス論の主たる特徴として次の6点が挙げられるとしている（Thrift, 2008, pp.135-137）。

(5) パフォーマンス論の特徴

第1に、（一般理論的には）パフォーマンス論は、物事を日常生活から離れたものとしてとらえるのではなく、あくまでも、日常生活的行動についてパフォーマンス的意義を強調するものである。すなわちそれは、基本的には、日常生活の流れの中にあるパフォーマンスを、特定の空間・時間におけるパフォーマンスとの対比関係において提示するものである。

第2に、パフォーマンス論の中には、パフォーマンスについて限界挑戦的なもの（liminal）としてとらえるものがある。こうしたものには、例えば支配的な社会的規範を疑問視したり、揚棄しようとしたり、あるいは変化させようとして、身体を懸けた運動をするものをも、エムボディされたパフォーマンスとしてとらえるものが含まれる。例えば liminality という言葉は、近年では、パフォーマンスの政治性（politics of performance）を理論化する際のキー的概念になっており、例えば1960年代～1970年代および1980年代～1990年代に展開された激しい反体制的な政治的運動を例にして、法規制を超えた行為（transgress）や抵抗（resist）、挑戦（challenge）の行動をもこうしたエムボディのパフォーマンスととらえるものがある（McKenzie, 2001, cited in Thrift, 2008, p.136 による）。

第3に（それ故）、パフォーマンスをもって不安定な時期を構築してゆくもの（constructing unstable times）と考えるものがある。例えばフェラン（Phelan, P., 1998）によると、「パフォーマンスで教えられることは、時間の間に違いがあることである。端的に言えば、人間は始めと終わりの時には絶対的に一人であるが、その間に実に多く様々なパフォーマンスがあつて、人生が創られてゆく。これによって人生の間では、パフォーマンスには事を生み出す力（generative force）があることがわかる」（cited in Thrift, 2008, p.136）。

第4に、（ただし）パフォーマンスには常に不安定なスペース、逆に言えば可能性があるだけのスペース（spaces of possibility）に関わっているとするものがある。こうした考え方によると、要するに、パフォーマンスの中には束の間（fleeting）的なものや一時的な対話的（dialogical）なものがあり、常にリスク（risky）なもの、つまり、常に失敗する危険があるものととらえられる。例えばスキーフエリン（Schieffelin, E. L., 1998）は「パフォーマンスに関与する様々な人々の中には、理論的にも実践的にも常にどこかで危険のあるものがある。故に常に悪しき形で終わるものがある」（cited in Thrift, 2008, p.137）と宣している。

第5に、（上記とは反対に）パフォーマンスには限界を越えるもの（transgressive）がしばしばある

と考えるものがある。これは、スリフトによると、ひとつには、パフォーマンスにはもともとロマンス性 (a romance) があり、その意味では規範的なもの (normative) であるからである。

第6に、パフォーマンスには、現代のアートとして記述され、例えば評論されること (writing) がすでに1つの問題 (a problem) であるものがある。というのは、なんのマーク (評価) もないもの (the unmarked) に何かマーク (mark: 評価) を付けることによって、その存在性が根本的に変更させられる (fundamentally alter) ことがある。例えばこれによって、いわば市場的・量的経済体制という考え方のもとに引き込まれ、価値が変化することがあるからである。

VI. あとがき—若干の結論的考察

本稿で主として取り上げたのは、スリフトの2008年の著書の中でも、第II部 (part II) であるが、その結論とっていい部分で、スリフトは、一方では、唯物論理論 (materialist analysis) は、近年では停滞している (still)。「認識 (cognition) のあり方を不当に強調することによって、および、この世界の理解 (understanding) を拡大する手段 (technologies) を有さないことによって、進歩が止まっている」とするとともに、他方では、非表象理論について、「プッシュを強調することによって、この世界の実際の姿をとらえることができるところの、“理論化” (theorizing) と“考察” (witnessing) に役立つ非常に有用な手段を提示するものになっている」(Thrift, 2008, p.147) と宣している。

この場合、非表象理論の強みは次の3点にあるとされている。①論述の様式 (style of work) が革新的であること。②これまで論究されてこなかったレベルの経験を取り上げるものであること。③方法論的には、“複数的パフォーマンス的方法論” (multiplying performative methodologies) を採ることである (Thrift, 2008, pp.147-148)。

①に関しスリフトは、「非表象理論は“グランド理論” (a grand theory) たることを高唱するものではない。というよりは、その強みはパフォーマンスの持つ物事を解明する力 (disclosive power) を強調するところにあり、かつ、戦略的であると同時に、期待に応えることが十分な治療的な方法 (hopefully therapeutic interventions) を生み出そうとするところにあるものであって、それは、例えばショットター (Shotter, J., 2004) が“エムボディされた埋め込み” (embodied embeddedness) として提示しているものである」と提議している。

②に関しては、要するに、例えば遊び (play) までも研究対象とするところにあり、これまで“極めて些細なこと” (trivial) とされてきたレベルにまで研究が達することをいうものとされている。

③に関しては、非表象理論は、複数学問間において「テキスト的な関係があることよりも、対話的な行為 (dialogical actions) があることを重視するものである。(それぞれが) 代表 (representation) ということよりも、相互に関係があることの方がより重要と考えるものであって、例えば美術、

彫刻、演劇、ダンス、詩作、音楽などのパフォーマンス・アートによって行われるところの、プレゼンスを強度化する (intensification of presence) ことに志向することによって、“パフォーマンス意識性” (performance consciousness) を強めるように努めているものである」(Thrift, 2008, p.148) と提議される。

この上でスリフトは、「理論が終わっても、何か事 (something) は生まれる。この事がどのようなものか、私 (スリフト) にはわからない。そこで何が問題であるかもわからない。しかしそれが、(これまでとは) 異なったものであること、それが生き生きとしたもの (lively) であること、文化的転回 (the cultural turn) と言われるものの、かなりエリート的是ではあるが故に、飽き飽きさせるような方向性 (cloying hegemony) に対して、挑戦的意義 (a challenge) を持つものであることは、はっきりしている」(Thrift, 2008, p.148) と述べている。

この場合本稿筆者として改めて注目されるべきことは、スリフトが、こうした考え方の象徴的論者として、ここで (Thrift, 2008, p.148), アメリカのプラグマチズム論の代表的論者デューイ (John Dewey) を挙げていることである。

スリフトによると、デューイは、非ディスコース的 (nondiscursive), 身体的 (somatic) な実践 (practices) を、この世のもの (従って哲学) にとって決定的なもの (crucial) として認めるところの、“感覚的学問” (sensuous scholarship) に専心したものであり、「そのような方法は、学問・知識を豊かにするのに有用であった」(Thrift, 2008, p.148) とされるものである。

ここには、一言でいえば、スリフトの考え方の方法論的な礎石があると総括される。本稿筆者としては、本稿冒頭で述べたところの、ここで展開されているスリフト説は要するに、パフォーマンス志向的アプローチの考え方に立脚するものであることが、ここでも改めて立証されていると考える。その場合、スリフトの非表象理論は、経済理論的には、もともとはマルクス主義経済理論の、少なくとも剰余価値理論が出発点をなすものであることが見失われてはならないと思料するが、この点は別稿において論じる。

参考文献

- Abercrombie, N. and Longhurst, B. (1998), *Audiences: A sociological theory of performance and imagination*, London: Sage.
- Bateson, G. (1973), *Steps to an ecology of mind*, London: Paladin Books.
- Bourdieu, P. (1991), *The logic of practice*, Cambridge: Polity Press.
- Burns, T. (1992), *Erving Goffman*, London: Routledge.
- Butler, J. (1990), Performative acts and gender constitution: An essay in phenomenology and feminist theory, in: Case, S. (ed.), *Performing feminisms: Feminist critical theory and theatre*, Johns Hopkins University Press, pp.26-35.
- (1997), *Excitable speech*, New York, Routledge.
- Crang, P. (1997), Performing the tourist product, in: Rojek, C. and Urry, J. (eds.), *Touring cultures*, London: Routledge.

- Deleuze, G. (1986), *The movement image*, University of Minnesota Press.
- (1995), *Negotiations*, Columbia University Press.
- Gell, A. (1998), *Art and agency*, Oxford: Blackwell.
- Goffman, E. (1971), *The presentation of self in everyday life*, Harmondsworth: Penguin Books.
- (1974), *Frame analysis*, London: Peregrine Books.
- Gordon, A. (1997), *Ghostly matters: Haunting and the sociological imagination*, University of Minnesota Press.
- Henalf, A. (1997), Actor-network, *Common Knowledge*, vol.6, pp.69-83.
- Irigaray, L. (1999), *The forgetting of air in Martin Heidegger*, London: Athlone.
- Kershaw, B. (1994), Framing the audience for theatre, in: Keat, R., Whitely, N. and Abercrombie, N. (eds.), *The authority of the consumer*, London: Routledge, pp.120-136.
- Latour, B. (1997), Trains of thought: Piaget, formalism and the fifth dimension, *Common Knowledge*, vol.6, pp.170-191.
- McKenzie, J. (2001), *Perform or else, from discipline to performance*, New York: Routledge.
- Marks, J. (1998), *Gilles Deleuze: Vitalism and multiplicity*, London: Pluto Press.
- Martin, R. (1998), Staging crisis: Twin tales in moving performance, in: Phelan, P. and Lane, J. (eds.), *The ends of performance*, New York University Press, pp.186-196.
- Morson, G. S. (1994), *Narrative and freedom: The shadows of time*, Yale University Press.
- Newman, F. and Holzman, L. (1997), *The end of knowing: A new developmental way of learning*, New York: Routledge.
- Phelan, P. (1998), Introduction, in: Phelan, P. and Lane, J. (eds.), *The ends of performance*, New York University Press, pp.1-19.
- Schechner, R. (1998), What is performance studies anyway? in: Phelan, P. and Lane, J. (eds.), *The ends of performance*, New York University Press, pp.357-362.
- Schieffelin, E. L. (1998), Problematizing performance, in: Hughes-Freeland, F. (ed.), *Ritual, performance, media*, London: Routledge, pp.194-207.
- Shotter, J. (2004), Responsive expression in living bodies, *Cultural Studies*, vol.18, pp.443-460.
- Threadgold, T. (1997), *Feminist poetics: Poiesis, performance, histories*, London: Routledge.
- Thrift, N. (2008), *Non-representational theory: Space/ politics/ affect*, London: Routledge.
- Wittgenstein, L. (1969), *On certainty*, Oxford: Basil Blackwell.
- 大橋昭一 (2018) 「記号論とは何か—「観光記号論」の礎石構築のために」『和歌山大学・観光学』19号, 57-62頁
- (2021) 「スリフトの非表象理論 (NRT) の研究—現代社会をどうとらえるか: 原理論の提起」『和歌山大学・経済理論』406・407合併号, 17-36頁

Studying the Bases of Non-representational Theory: The Theory on Society

Shoichi OHASHI

Abstract

This study examines the bases of non-representational theory of Nigel Thrift, which is first of all characterized by “non” against the representational theories combining such many works as Karl Marx, John Dewey and so forth, in order to make it a departing point of modern theories on society, which has to be evaluate lofty as today’s general theory.